

# 天塩国中峰の平湿原

松 田 彊

## 口はじめに

現在残されているサロベツや釧路のような大河の河口に発達する湿原は、様々な点で問題になっている。しかし海拔の高いところにある「山の中の湿原」は尾瀬などは例外にして直接社会的影響を受けないことから、あまり話題にのぼらない。原因は交通の便が悪いこと、面積の小さいことなどが考えられるが、やがて問題とされる可能性は充分ある。本道でも、この山の中の湿原で大きいものは、大雪山系の周辺にかなりみられるが、小規模なものもまた広範囲に分布しているようである。

本稿では、その一つである北大天塩地方演習林内の通称中峰の平について簡単に紹介してみよう。

## 口位置

北大天塩地方演習林は、天塩郡幌延町間

寒別にある。新しく国立公園になったサロベツ原野は、この幌延町と北の豊富町にまたがっており、往年の平野部は、これらの湿原と湿地性のアカエゾマツ林で埋まっている。演習林は、天塩川の一支流である間寒別川で東西に分けられている。西側は第三紀層の上に針広混交林が生立しており、また東側は神居古潭帯の北端部にあり、白亜紀に貫入した蛇紋岩が広く分布している。この蛇紋岩の上にはアカエゾマツの天然林が生立しており、また特殊な植物群落がみられる。地形は、おおむね緩やかな丘陵地がつづき、海拔二〇mから最高点で五八〇m足らずである。ここでふれる湿原は、この蛇紋岩地帯の海拔四五〇mの山頂の平坦部にあり、約五haの面積をもっている。

## 口植生

この中峰の平の湿原を含めて、館脇先生の湿原のアカエゾマツ林に関する研究がすでにあるので、興味ある方はそれを見ていただきたい。中峰の平の特徴は、アカエゾマツ林が生立していることで、中心部にヤチシニコ、または泥炭松と呼ばれる背の低いアカエゾマツがあり、同心円的に樹高を高め、湿原周囲では通常の林を作っている。木本類は他にハイマツ、リシリビヤクシン、ケヤマハンノキ、エゾイソツツジ、イヌツゲ、ガンコウラン、ツルコケモモなどである。湿原の中心部にはササはほとんどみられず、ミカツキグサ、ミカエリスゲ、ヌマガヤ、ミズゴケなどで覆われている。他の湿原と異なり、ホロムイスゲ、ヒメシヤクナゲを産しないこと、ハイマツ、リシリビヤクシンを生ずることが特異な点であると館脇先生は述べている。

## 口アカエゾマツ矮性林

アカエゾマツは、立地条件に広い適応性



表1 アカエゾマツ樹高階別本数表

( ) は枯損木

| 調査地            | 樹高<br>0~10<br>cm | ~50       | ~100      | ~200     | ~300     | ~400     | ~500 | ~700 | 計          | 本数/ha          |
|----------------|------------------|-----------|-----------|----------|----------|----------|------|------|------------|----------------|
| 中峰の平<br>5m×25m | 1<br>(0)         | 27<br>(3) | 17<br>(3) | 6<br>(4) | 3<br>(3) | 2<br>(5) |      |      | 56<br>(18) | 4480<br>(1440) |

表2 伸長に要する年数

| 樹種     | 樹高 | 30cm迄                       | 60cm迄             | 130cm迄             | 230cm迄              |
|--------|----|-----------------------------|-------------------|--------------------|---------------------|
| アカエゾマツ |    | 平均27年 (43本)<br>Max55年~Min4年 | 50年 (16)<br>119~9 | 90年 (18)<br>46~133 | 151年 (10)<br>89~176 |
| ハイマツ   |    | 13年 (7本)<br>5~20            |                   |                    |                     |

をもった樹種であり、造林木としても重要な地位を占めている。しかしその天然林は、どちらかといえば他の樹種の生立しにくい場所に分布しているのが現状であり、それがまた一つの興味ある問題でもあるが、ここではそれはおくとする。昨年、筆

者達の行った調査結果があるので、このアカエゾマツ矮性林についてふれてみよう。

調査地は湿原の中央部にとり、樹高の低いものが対象となっている。樹高については、表1でわかるとおり、三・八mが最高であり、大半が1m以下である。形態は少し大きいものの全部が、梢頭の折れ、枯れ、幹のねじれ、曲がり呈している。枯損木の率が大きいのも特徴である。樹令は最高で三六〇年(枯木)、また生きているものでは三〇三年であった。これは極相林のアカエゾマツの最高樹令の半分くらいであらう。ハイマツは調査地の中には九本あり、樹高は1m以下、樹令は五〇年前後であった。表2は一定の高さに達する年数を示してあるが、これで見ると、笹や上木の被圧がないにも係わらず、非常に成長が遅いことがわかる。

以上のことを簡単にいえば、このアカエゾマツの群落は過酷な条件のもとで、かろうじて更新と成長を維持しているということになる。とにかくこのような山頂の湿原が、いかに推移していくかは、今後とも観察する必要があるだろう。

口おわりに

湿原に生立するアカエゾマツ林を中心に述べてきたが、最後にひとこと。驚いたこ

とに、この道もない山の上の湿原に、この盆栽状の木をとりかなりの人が入りこんでいる。沢をつめ、笹藪をこいで、往復二〇km近くを歩き、掘りつけていく。湿原は穴だらけで、ビヤクシンなどはあまりみられない。もともと個体数も少なく、更新が困難なのだから、この状態がつづけば湿原の矮性林は消えてしまう。それも地元の人よりは、どうも遠くからやってくる人が多いらしい。他の蛇紋岩植物やヤマベにして、都会の人は神風的にやってきてさらっていったらいい。

このように感ずるのは、人間さえもあまり保護されていない田舎に住んでいる者の、ひがみばかりとはいえないと思うが。ともかく、自然を保護するには、人間を遠ざけなければならないという現状は、まことに情ないことである。

参考文献

館脇・五十嵐・北大天塩中川地方演習林の森林植生 北大演習林研究報告

二八の一(一九七二)

(北大中川地方天塩演習林)